

# ポール・カリーの ワールド・ビヨンド

Written and  
Illustrated by

ポール・カリー

82 の補足

Drawings by  
ケリー・ライルズ



HERMETIC PRESS, INC

ワシントン州シアトル

★ 本書は、原書の自動翻訳を基に編集してあります。  
(一部おかしな日本語もあります)

★ ただし、原書にある 80 を超える 作品中、彼の代表作や内容の面白いものなどを中心に 30 作品 については、脚注も含め平賀義達氏の完全翻訳を掲載しております。

⇒ これら THE CURRY TURNOVER CHANGE (カリーの・ターンオーバー・チェンジ) を含む 30 作品 については、分かるように **ゴシック体** で編集してあります。十分堪能していただけるものと思います。

# < 目次 >

- ★ ページ数は英書の物です
- ★ 日本語解説書 PDF は 4 分割してあります
- ★ 枠で囲んだタイトルは、平賀義達氏の完全翻訳のものです。

## ①

---

ポール・カリーの時代に IN THE TIMES OF PAUL CURRY

旅程 ITINERARY

パスポート PASSPORT 1

ターンオーバー・チェンジ The Curry Turnover Change 3

相対性理論リフト The Relativity Lift 6

ドローバック・ダブルリフト The Drawback Double Lift 10

時間変更 The Time Change 14

ドローバックバニッシュ The Time Change 17

ザ・タップ・パス The Tap Pass 19

ザ・サイド・パス The Side Pass 22

ボトムパーム Bottom Palm 26

パッキング PACKING 29

サークル・オブ・ファイア Circle of Fire 31

火の交換 Exchange of Fire 36

キッシングカード Kissing Cards 40

ツーカード・ルーティン Two-card Routine 45

## ②

---

サイダー! Cider! 59

**Sure Thing** 65

カラーチェンジングデッキ The Color-changing Deck 71

嘘つき You're a Liar 79

真実を伝えるジョーカー The Truth-telling Joker 81

嘘をつかないで Don't Lie to Me	83
ハーフゴーン Half Gone	90
フーディーニの伝説 Houdini's Legacy	96
過去からの脱却 Out of the Past	102
テレポート Teleport	106
ファンタシーアンダーグラス Phantasy Under Glass	112
袋の中で Under Wraps	118
プレスト Pressto	122
先生のペット Teacher's Pet	125
世紀の変わり目 Turn of the Century	129

③

---

ポストカード (Thinking of you)	137
確率ゼロ Probability Zero	139
別名シャーロック・ホームズ Alias Sherlock Holmes	143
マッチメーカー Matchmaker	147
電話帳のブックテスト Out of This Phone Book	153
パディング Padding	156
ペイオフ Payoff	159
ペニー・フォー・ユアソート A Penny for Your Thoughts	164
時の流れの中で A Turn in Time	172
スーツケース Suitcases	181
アウトオブ・ジスワールド Out of This World	183
ベストオブ・ポッシブルワールド Best of Possible Worlds	190
運の魅力 The Charm of Luck	195
<b>Another Stop!</b>	200
思ったカード Think of a Card	202
ワンダウン One Down	204
タッチ Touch	206
ダブルプレディクション Double Prediction	212
未来のスリーカード Three Cards in the Future	214
スモークシグナル Smoke Signals	221

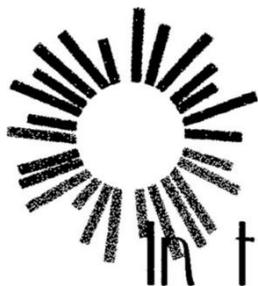
思考転送	TOUGHTS FROM AFAR	223
オープン・プリディクション	The Open Prediction	230
カード 13 の問題点	The Problem of Card 13	237
シークエンスの謎	A Swindle of Sorts	245
アウトオブマインド	Out of Mind	250
暗黒の時代	A Period of Darkness	258
<b>TRAVEL TIPS</b>		261
シガレットスイッチ	Cigarette Switch	263
センターティアハンドリング	Center Tear Handling	264
疑似サイコメトリーのヒント	Pseudo-psychometry Tip	267
④ -----		
マリーニ・アイディア	The Malini Idea	268
誤認されたパーム	The Miscalled Palm	270
ワンウェイフェイスデザインチップ	One-way Face Design Tip	272
カード当てのヒント	A Card Revelation Tip	273
シェアード・デステイネーション	Shared Destinations	275
スタンプ・イット	Stamp-it	277
奇妙な予言	A Cur(r)i-ous Prediction	281
読心術?	Mind Reading?	284
<b>Do as I Do</b>		286
ネクスト!	Next!	288
フォローミー	Follow Me	292
パーフェクトミラクル	The Perfect Miracle	296
ネバー・インナ・ライフタイム	Never in a Lifetime	298
トゥー・トゥギャザー	T wo Toge the r	304
思考の力	The Pow er of Thought	307
さらなる思考の力	Mor e Pow er to the Thought	314
ワン・フォー・ザマネー	One for the Money	319
<b>IOU</b>		321
<b>2 FOR THE SHOW</b>		325
消えた帽子の行方	The C a s e of the M i s s i n g H a t	327

⑤

ターンアバウト Turnabout	335
<b>on the ropes</b>	343
リンクド Linked	345
ミッシングリンク Missing Link	348
オンとオフ On and Off	356
スライディングノット The Sliding Knot	359
復元力のある Supreme Restoration Supreme	370
<b>SOURCES</b>	377
<b>bibliography</b>	380



ポール・カリーと妻のマルティナ  
「アウト・オブ・ディス・ワールド」が発売された1942  
年頃。



## ポール・カリーの時代

ここにあるのは、著名なポール・カリー氏が実用的なパフォーマンスを実現するために、エレガントに構想し、細工し、実現した傑作魔法のバイキングです。つまり、彼の優れたオリジナル作品を集めた待望の回顧展なのです。

ほとんどのマジック愛好家は、ポール・カリーの名前を 1942 年に発売されたカードの名作「アウト オブ ディスワールド」の作者として認識していることでしょう。タイミングが良かった。デューク大学の J.B.ライン教授は、印刷された記号を 5 回繰り返したデッキを使って「超感覚的知覚」のテストを行っていたが、精神的な識別のテストで常に平均以上のスコアを出せる被験者を探していた。当然のことながら、ほとんどの結果は決定的ではなかった。しかし、その後、ポールは自分の発明を「OOTW」と略して呼ぶようになった。すぐに大統領、王様、首相をはじめ、任意に選ばれた誰もが、一度も顔を見ずにトランプの色（赤か黒か）を絶対に見分けることができる。これは、我々に与えられた特別な才能である。

当然のことながら、この検証されたデモンストレーションは非常に印象的で、老舗の第一人者であるダイ・バーノン氏は、たまらず「世紀のカードトリック」と定義しました。この教授の称賛は、確かに前世紀にはふさわしいものでしたが、その延長線上にあるものだと思います。私は、「OOTW」が 21 世紀になっても驚きの産物として存続すると考え、その延長線上にあるものとしします。ただし、「トランプの

トリック」とは言わないでください。馬車と宇宙旅行を比較することはできないし、するつもりもありません。

しかし、「ワールド」が席卷する数年前、ポールが市場性のあるマジックの領域に初めて足を踏み入れたのは「タッチ」でした。自由にタッチしたトランプを、最も直接的な手順で、シンプルに、明確に、確実に予言するというものだ。大ヒットとなったが、このデビューには意外な負の側面もあった。故T.A. ウォーターズ氏が「マジックとマジシャンの百科事典」で簡潔に報告しているように、「カーリー効果は、広く模倣され、単に盗用されている」と簡潔に報告しています。確かにその通りであり、後のマジックにおける、カーリー作品の、先駆けとなったのです。

「スタンプイット」、「プロバビリティ・ゼロ」、「パワー・オブ・シンクト」など、ポール・カーリーの驚くべき効果の数々が紹介されています。また、晩年には、ダグ・ヘニングが考案したロープを使ったイリュージョン「The Sliding Knot」を発表しています。これらは全てこのページで解説されています。

ポール・カーリーと私が初めて知り合ったのは、1930年代半ばの10代の頃だった。この時代は、経済不況が蔓延していたため、その後の辞書では単に「大恐慌」と定義されるようになった。娯楽といえば、家族がラジオを囲んで、15分や30分の連続番組を聴くのが一般的だったが、「しゃべる家具」とは、コメディアンのフレッド・アレンの言葉である。しかし、ちょっと贅沢をしたければ、まだボードビルが一部の劇場で上演されていたし、その他の雑多なイベントでは、私たちの興味と関心がどんどん高まっているマジシャンが登場することもあった。

その頃、あらゆる世代の杖使いを引き寄せる強力な磁石となっていたのが、ニューヨークのタイムズスクエアにあったマックス・ホールデ

ンのマジックショップだった。マックスと妻のテスは、ボードビルの経営者であり、訪れる人々を心から歓迎していた。

特に、カウンターの客席側のベンチに座っている雑多な練習生たちには寛容だった。壁には、マジック界の「大物」たちのサイン入り舞台写真がずらりと並んでいました。その中でもひととき目立っていたのは、偉大なるHarry Blackstone, Sr.の巨大なカラー写真でした。

こうして、ポールと私、そして増えつつある同好の士は、土曜日の午後になると、近所の映画館ではなく、定期的にこの場所に出没するようになった。やはり、ダブルリフトを正しく行うことは、ダブルビルを見るよりも難しいのです。とはいえ、常連客の中には、必ずしも完璧とは言えない手品を披露する者もいた。ポールは私の心の中で、これを"2枚のカードを持つファン"と定義した。

その会場で、魔法の名手たちとの初めての出会いは、畏敬の念を抱かせるものでした。特に、禁断の秘密を手に入れようと悪意を持って神聖な場所に侵入しようとする、生意気な若い弟子たちからは、神々の思し召しであった。やがて、氷が解けてきた。ネイト・ライプツィヒ、アル・ベイカー、ジーン・ヒューガード、ダイ・バーノン、ジョン・スカルン、ジョン・マルホランド、ハーラン・ターベル、ウォルター・ギブソン、テッド・アネマン、ルイス・ジンゴン、ロイ・ベンソン、アーサー・ロイド、ジェイコブ・デイリー博士など、そうそうたる面々が若い者を受け入れるようになったのである。しかし、ポール・カリーは当初から、手際の良さ、特に手法やプレゼンテーションを評価する際に平然と口にするアイデアの素晴らしさを評価され、称賛されていた。ポールは確かに欠点を見抜き、大抵の場合、当初の前提を超えるような巧妙な改善策を提案していた。そう、マジック界の頂点に立つ人たちは、本当に感心していた。

マックス・ホールデンの店で"仲間"になった魔法使いの卵たちの多くが、マジックや関連するパフォーマンス・アーツの分野で大きな功績を残したことを、ここに記録しておきたい。まず、14歳でアメリカ

ン・マジシャンズ・アセンブリーのショーに出演し、同席していたベアトリス・フーディーニに新聞記事で賞賛されたビクター・コーラーの名前を挙げなければならないだろう。彼は14歳の時にアメリカのマジック協会のショーに出演し、観客として参加していたベアトリーチェ・フーディーニに新聞で賞賛された。ある時期からヴィック・クイックと名乗るようになり、その名で『Genii』誌の表紙を飾った。その後、ジョン・カルバートと一緒にテスピアン号に乗り込み、中国大陸を航海した。

様々な寄港地への船旅。を巡って長々とやり取りをしました。しかし、いつの間にか連絡が取れなくなってしまい最後に住んでいたのはオーストラリアのシドニー郊外にあるニュートラルベイ。

フランシス・フィネランは、エディ・マーロがカーディシャンという言葉を作るずっと前から、優れたカーディシャンとして活躍していましたが、偶然にもポール・カーリーと同じような特徴を持っていました。もしかしたら、この名前を知らない人もいるかもしれませんね。その後、彼はフランシス・カーライルと名乗るようになりました。やがて、彼とダイ・バーノンは「ハリウッドに行って」マジックキャッスルの周辺に移住した。

マイルス・ライオンズは、クローズアップ・ワークやプラットフォーム・パフォーマーとしては十分な腕前を持っていたが、彼が得意としていたのは、ジョークや面白い話を、あらゆる装飾や方言、ビジネス上のちょっとした工夫（シュティック）を加えて話すことだった。つまり、スタンダップ・コメディアンである。彼は第一次世界大戦中、ヨーロッパに派遣されたU.S.O.一座の一員であり、乗っていたジープが横転して不幸にも亡くなった。ポール&マルティナ・カーリー夫妻は、息子の一人を彼にちなんで命名した。また、私たちの中には、サイ・エンドフィールドという独創的で才能豊かな人物がいて、彼とは多くの魔法のアイデアを共有しましたが、そのほとんどは、後にルイス・ガンソンが発表した3部作に活字化されています。「Cy Endfield's

Entertaining Card Magic」である。サイはかつて、マジックに貪欲だったオーソン・ウェルズに紹介され、彼のマーキュリーシアターのアシスタントとして採用されたことを語っている。ウェルズは、「ああ、そうだ、サイ・エンドフィールドだ」と口にしたという。「その名前は知っているよ。誰かにカードトリックを見せようとする、いつもその名前を聞くんだ」。やがてサイは、多くのハリウッド映画の脚本・監督を務め、後にイギリスで監督業の頂点に立つことになる。

ビル・ノルドはカードを持った心気症患者で、私がマジック界に入る前からマジック界の一員だった。例えば、プラスチックの箱に書かされた文字の印象を得る「ビルズバブ」や、観客の指にチェーンで吊るされた小さなプラスチックの頭蓋骨の顎に置かされたカードのポケットから選ばれたカードを出現させる「スカル・ロケーション」などです。(John Scarneのお気に入り、彼も高く評価していました。)

シド・マーグリーズやアイラ・ツヴァイファクも早くからマジックを始めていましたが、多くのトリックを行うというよりは、トリックの方法や構造を理解することが主な目的でした。彼らの一番の楽しみはただ、マジシャンと一緒にいるだけでいいのだ。シドは両手に6本の指を持っていたが、6本目の指はいずれも90度外側に突き出ており、その出っ張りを恥ずかしいと思うどころか、手術で取り除こうとも思わない。

アイラとシドは、政治的には正反対の立場にあり、土曜日の夕方にアイラのアパートで、それぞれの立場について長々と議論していた。これはマジシャンたちの非公式な集まりで、本当に重要なマジックの内容を考える前に、避けられない休戦を辛抱強く待っていた。ブルース・エリオットも時々参加していたが、その後、金曜日の夜は自分のアパートに会場を変え、マーティン・ガードナーやビル・サイモンなどのゲストを増やしていった。しかし、アイラは週の半ばにニューヨークのミッドタウンのレストランでランチをアレンジし続け、ポール・カリー、ブルース・エリオット、クレイトン・ローソン、ウォルター

・ギブソン、ジョン・マルホランドなどが参加していた。私もベン・ブラウデ博士も、勘定が高くなりがちだったので出席は散々だった。ポール・カリーは、これまでに発売したエフェクトが好評だったこともあり、自分のお気に入りのクローズアップ作品を集めたコレクションを発売する可能性を考えていた。この噂は、私たちのグループ内では、トップシークレットが広まるのを嫌っていた。しかし、最終的にはポールの意向が通り、私も自分の栄光にあやかりたいと思い、自ら原稿のタイプを担当した。その結果、『Something Borrowed, Something New』という地味なタイトルになったのである。

ホッチキスで留められたタイプ原稿で、500部程度の発行部数という気取ったものではないが、そこには光り輝く宝石が散りばめられていたのである。幸いなことに、これらの作品のほとんどは、この後のページで再び皆さんの目の前に蘇ります。

クローズアップ・パフォーマンスの中でも、特に優れているのが「ツーカード・ルーティン」で、テーブルの上で大きく離れた2枚の異なるカードが入れ替わるものです。これは、主にカリーのターンオーバー・チェンジを利用しています。このターンオーバー・チェンジは、この「ツーカード・ルーティン」のために特別に考案されたものであることをここで明かします。カードを持った左手が左のカードを裏返し、右手が右のカードを裏返すことで、左手の"焼け"がなく、両手を動かすことですべてが成立するのです。ポールの考えでは、片手だけで行われたターンオーバー・チェンジには欠陥があるとされています。彼はまた、4枚のエースのような複数のカードをターンオーバーで変えることにも強く反対しました。「Overkill」という言葉は、当時の彼が使っていた言葉だと思ふ。

ポールー、アマチュアやプロのマジック愛好家に提供した優れた資料に加えて、1965年にフランクリン・ワッツ社から出版された『マジシャンズ・マジック』の著者でもあり、この本は図書館員や教育関係者から高く評価され、ヤングアダルトの読者に最高の「推奨」を与えら

れた。マイク・カベニーの著書『ハリー・アンダーソン。1971年、ハリーはオレゴン・シェイクスピア・フェスティバルの主催者を説得して、ロベール＝フーディンの「Ethereal Suspension」の模型を作ってもらった。その結果、そのシーズンは安定した仕事を得ることができましたが、ハリーは、決闘用のピストルと印のついた鉛のマスカット銃の玉を使って、バレット・キャッチング・トリックの独自のバージョンを無謀にも考案してしまい、他の仕事にもつながりました。

ポール・カリー氏は、見事なバレットキャッチングを行うための方法をどのように考案したのでしょうか？ポールは一度はその方法を思いついた。直接的な方法として、彼はボランティアの射手に渡すライフルの木製ストックに、"Be a good sport and shoot over my head."（良いスポーツをして、私の頭上を撃て）という指示を刻むことを提案した。（もちろん、この「方法」は冗談だが、テッド・アンネマンが使ったとされる方法に似ている。）

ポール・カリーがプロのマジシャンではなかったことを知って驚く人もいるが、数学、魔法、ゲーム、パズル、光学的なイリュージョンなど、多方面で活躍したマーティン・ガードナーのように、彼はすべての活動において受動的な役割を果たすことに満足していた。彼は、どんな公的な場や媒体でも、自分を誇示したり、スポットライトを当てようとする誘いを避けていた。彼がビジネスの世界に足を踏み入れたのは、ごくごく初期のことだった。1938年、高校卒業の資格しかない彼は、ニューヨークのブルークロス社のメールルームで働き始めた。1968年には副社長に就任し、1974年に退職するまでその地位にあった。1977年には Academy of Magical Arts から「Magicians' Hall of Fame（マジックの殿堂）」の称号を授与されている。

さあ、これからもずっと、ここにあるトリックや楽しい機微を見つけてください。さあ、神秘的な世界へ！

オスカー・ワイグル  
ホワイトストーン、ニューヨーク



## Itinerary : 旅程

ポール・カリーの作品を見ていると、20世紀のマジック界を代表する巨人、アレックス・エルムズリーの作品とカリーの創作人生が似ていることに気付きます。エルムズリーはカウント、カリーはターンオーバー・チェンジというように、二人ともカードマジックの世界でその名が語り継がれるようなトリックを開発しました。

二人とも、爆発的な創意工夫でマジックシーンに登場し、仕事や家庭の事情で何年もマジックから離れていましたが、人生の後半になって、成熟した素晴らしい再来を果たしました。ポール・カリーは、1937年に発表した「タッチ」というトリックで、マジシャンの間で評判になりました。このトリックは、現在でも、パフォーマーが発明者を知らずに演じられることが多いのですが、後述します。タッチの後、1930年代後半から40年代にかけて、「アウト・オブ・ディス・ワールド」をはじめとするいくつかの市販作品が発表されたが、その中には「アウト・オブ・ディス・ワールド」とほぼ同等の素晴らしい作品も含まれていた。この時期、彼は初めての本を自費出版している。この『*Something Borrowed, Something New*』は、「何かを借りて、何かを新しくする」という自虐的なタイトルである。自虐的な多重録音作品。自虐的すぎたのか、内容は素晴らしいのに売れなかった。

カリーは、その独創性から、会話の中で多くの素晴らしいアイデアを、記録に残すことなく投げかけていた。ブルース・エリオットは、この問題を解決するために、「*The Phoenix*」にカリー氏のコラムを掲載して、彼のネタの出口を提供しようとした。カリー氏は、1947年4月11日から12月26日まで、15回にわたって「*Curry Favors*」を連載した。しかし、その年の暮れに、このカリー・マジックの入り口が何の前触れもなく閉じられてしまったのである。

その後、27年間の沈黙が続いたが、3つの短い記事と、1965年に出版された一般向けの優れたマジックの入門書『Magician's Magic』だけが残った。この沈黙の間にも、カーリーはニューヨークのブルークロス保険会社の郵便室から副社長にまで上り詰めるという快挙を成し遂げた。1974年にその職を退いた後、1986年2月19日に亡くなるまでの10年間、カーリーの創意工夫が次々と生まれた。

このページでは、ポール・カーリーが生前に制作したマジックのすべてではなく、幅広く決定的なものを集めようと試みました。カーク・チャールズ氏は、カーリー氏が生涯に渡って繰り返し行った効果の中からあまり役に立たないものを選別し、ベストバージョンと思われるものを選ぶという考えで、出版された作品の分厚い山を集めた後、カーク・チャールズ氏に渡しました。チャールズ氏は、長年の公演で培ったプロ意識から、効果の割に手順が多すぎると思われるトリックをいくつか除外した。しかし、多くのプロの現場では長すぎるが、ゆったりとした時間の中で開花させれば非常に大きな力を発揮するものも、批判の対象を広げて通過させています。

ポール・カーリーのマジックは、まばゆいばかりの視覚的なものは少なく（注目すべきまばゆいばかりのものもあるが）、視覚的な効果の閃光や閃きが消えた後も、観客の記憶に深い印象を残すような、頭脳的なものが多かった。これらを総合すると、チャールズ氏がカーリー・オペラの検証を終えたとき、除外すべきものはほとんどなく、彼の作品の大部分はこのボードの間に表示されている。

とはいえ、このような選択をすることは常に恣意的な作業であり、真剣な学生はこの作品を読んだ後、次のようなことを望むでしょう。

稀覯本の中にあるカーリーの原書を探して、自分の目には見えなかった逸品を見つけ出すことです。（そのためのロードマップは、380ページを参照してください）。

さて、今回の旅のルートについて簡単にご紹介しましょう。カーリーはカードマジックやメンタリズムを好み、驚くべき "偶然の一致" や "

シンクロニシティ"の効果を開発する傾向が顕著でした。本書の各章では、こうした傾向を踏まえ、オリジナルのカードスリーツに始まり、トランプを使った魔法の効果、メンタル・エフェクト、カードを使ったメンタル・エフェクト、さまざまなテーマのヒント、シンクロニシティ・エフェクト、そして最後にコイン、リボン、ロープ、特殊カードを使ったマジックの分野に踏み込んだ3つの章で構成されています。

似たような効果やテーマをまとめて、カリーの手の中でアイデアがどのように成長し、発散していったかを読者に伝える試みをしていますが、繰り返しにならないようにしています。

この本に掲載されているトリックの説明は、5つの例外（すべて初期の作品）を除いて、Paul Curry が書いたものです。私が編集したのは、誤りの訂正、明確さの確保、冗長性の排除、文体の一貫性の確保などを試みた程度である。

この本のために情報を提供してくださった Oscar Weigle 氏、Max Maven 氏、Milt Kort 氏に感謝の意を表さないわけにはいきません。また、Matthew Field 氏には、鍛え抜カリーた目で本文に目を通していただき、出版前に何十もの見落としを修正していただいたことに心から感謝しています。

旅程の説明を受けた後は、ポール・カリーの驚くべき世界への旅の準備をしてください。

スティーブン・ミンチ ワシントン州シアトル市

—以上、上記は<自動翻訳>です—

# パスポート



## カリーのターンオーバーチェンジ

### THE CURRY TURNOVER CHANGE (平賀氏翻訳)

(訳注：この技法は、PAUL CURRY が 22 歳の頃に考案した初期の技法ですが、本書の中のトリック以外にもその有効性が評価され、その後他のマジシャンのトリックにも使われているものです。訳者も大学生の頃に、この技法を使ったカードマジックと出会い、一生懸命練習したものです)

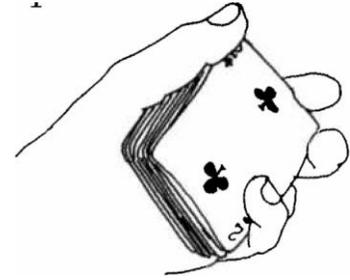
(3 頁脚注：以下の説明は JEAN HUGARD によるもので、CURRY 氏自身が説明したものではありません。彼は一度だけ、自分の書いた物の中で HUGARD の説明を短縮して引用していますー編集者)

このチェンジの実際の仕組みは MEXICAN TURNOVER とは全く違いますが、全体的な印象は似ています。つまり両者とも、カードがテーブルに裏返される時か、表返される時にチェンジが行われます。

この技法の基本的なコンセプトは、テーブルにある 1 枚のカードとデッキのボトムカードをスイッチすることです。デッキを持った手でテーブルのカードをひっくり返す時に行います。もしデッキを左手に持っており、テーブルのカードが表向きならば、左手でカードを裏向きにする時にチェンジが行われるのです。テーブルに裏向きに置かれたカードは元々デッキのボトムにあったカードであり、テーブルにあったカードは、今はデッキのボトムにあるのです。

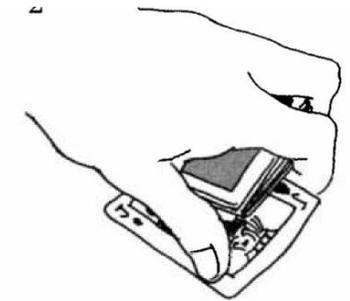
---

デッキを左手に裏向きに持ちますが、左中指と小指の第1関節でボトムカードのフェースを押さえながら、薬指の第1関節を曲げてボトムカードの上に入れます（図1—下から見たもの）。こうするとボトムカードはその右サイドで3本の指でしっかりと保持され、仮に3本の指を伸ばすととはさまれて一緒に動き裏表がひっくり返る事になります。



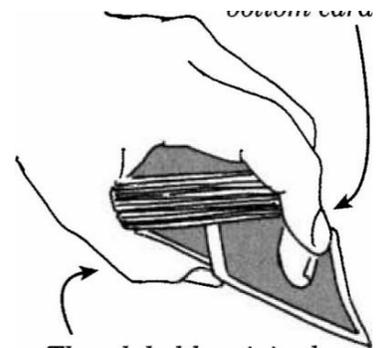
このチェンジがうまくいくかどうかは、左手にデッキが正しく持たれているかどうかにかかっています。デッキはしっかりと深く持って、人差し指がデッキのエンドより出て動ける状態になっています。このチェンジで主に働くのは中指、薬指、小指であり、親指はこのチェンジにはほとんど役目がありません。

チェンジするカードをテーブルに表向きで横向きに置きます。



左手をそのカードの所に持って行き、左親指先をそのカードの右手前隅から2・5cm位の所のサイドを押さえます。同時に人差し指先を反対側のサイドの下に入れて起こします（図2）。親指・人差し指でカードがテーブルに対して垂直になるまで横向きで起こしたら、左手を少し右へと動かしながらカードを裏向きにテーブルに置きます。

チェンジが行われるのは、その瞬間です。親指でひっくり返したカードを押さえ、同時に薬指を伸ばして元のボトムカードをテーブルに押し出します。テーブルにあったカードは親指で押さえられ、デッキのボトムに残ります（図3）。



チェンジは、テーブルのカードをひっくり返す自然な動作の中で左手がやや右手前に動く時に行われます。

始めは、中指でボトムカードを押し出す時に、そのカードのサイドをテーブルに押し付けることが必要かもしれませんが、慣れてくるとそれも必要なくなります。

全体の動きをスムーズに行うためには、練習が必要です。ただ、この技法を正しく行えば、単にテーブルのカードをひっくり返したとしか見えません。

1939年

(5頁脚注：THE CURRY TURNOVER は、よくギャンブラー達がカードテーブルでイカサマのスイッチをする時のやり方に似ていると言われる時があります。CURRY 氏の技法よりも前からあるこうしたスイッチは、当時ギャンブルも研究していた JOHN SCARNE などもよくやっていました。CURRY 氏が実際にそうしたギャンブルテクニックと出くわしてヒントを得たのかどうかは、残念ながら判りません。しかし面白いことに、「THE LINKING RING」誌 1955年1月号で、EDWARD MARLO は GAMBLER' S SWITCH の方を、CURRY 氏の技法のヴァリエーションとして紹介していました)

(訳注：OSCAR WEIGLE が巻頭で書いているように、この TURNOVER CHANGE は元々左右の手でカードを1枚ずつ同時にひっくり返す時のために考案されたものです。左手でカードをひっくり返すだけであれば、わざわざデッキを持った手でひっくり返す必要はないからです。右手に何か持っている場合にも使えます。ただ、単独でチェンジをしているケースもあるようですが、本来は左右両手で同時にカードをひっくり返す時のためのものです)

—以上は、＜平賀氏翻訳＞—

★ 以下、このように＜自動翻訳＞のものと、＜平賀氏完全翻訳＞の物とが混在します。